

第 11 回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

# 「おばあちゃんのドライヤー」

埼玉県立浦和第一女子高校 1年 上田 侑乃



賢治のまちから  
**全国高校生★童話大賞**

優秀賞〈銀の星賞〉

『おばあちゃんのドライヤー』

埼玉県 浦和第一女子高等学校一年 上田 倍乃ゆきの

ふうちゃんは、おばあちゃんと一緒に暮らしている。ふうちゃんと、お母さんと、お父さんと、おばあちゃんの四人家族だ。

おばあちゃんは、ふうちゃんが四歳の夏にふうちゃんの家にやってきた。それまでは「きぬうしゅう」というところに住んでいたらしく。ふうちゃんの「おじいちゃん」はとうの昔に死んでしまっていた。ふうちゃんは「おじいちゃん」を知らなかった。

だからといって、ふうちゃんはおばあちゃんのことについてたくさん知っている訳でもなかった。

ふうちゃんの知っていることは、おばあちゃんが、朝とても早くに起きて、田んぼくりカレンダーを丁寧に破る」と、ご飯を食べるのがふうちゃんよりも遅いことと、時々一人で何かお話していることと、いつも古いドライヤーを使っていることだった。

おばあちゃんは、おうちでのお仕事は何もしていなかった。それが、やらないのかできないのか、ふうちゃんには分からなかつたし、よく考えたこともなかつた。ただ、ふうちゃんのお母さんは、おばあちゃんが何もしなくても全然怒らなかつた。なのに、ふうちゃんには「お手伝いをしなさい!!」とものすごい顔で怒るから、ふうちゃんはおばあちゃんはずるくなあと思つていた。

そんなおばあちゃんでも、お風呂をあがつたふうちゃんの、濡れた髪を乾かすのだけはいつもやつてくれた。お母さんが乾かしてくれないのでなく、ふうちゃんがお風呂から上ると決まっておばあちゃんの部屋に行くのだった。

そんな時でもふうちゃんはおばあちゃんと何も話したりしない。ただ、ふうちゃんはおばあちゃんが髪を乾かしてくれるのが好きだった。





おばあちゃんが古いドライヤーのスイッチをきちんと入れる。静かな部屋にブーンという低い音だけが響く。それが気持ちよかつた。

おばあちゃんはいつも、ふうちゃんの髪の毛を頭のてっぺんの方から乾かしていった。ドライヤーの中から漂う、埃ほいじが焼けるような古くさいにおいもふうちゃんは好きだった。耳の後ろに時々当たる、柔らかいおばあちゃんの指先が、何とも気持ちよかつたし、弱いけれど暖かい風が耳にかかるとすぐつたかった。髪が引っ張られて、それについていくように頭の皮も引っ張られるのも良かつた。眠ってしまいそうなほど気持ちよさの中で、ふうちやんはいつもああ幸せだなあとと思うのだった。

おばあちゃんは、古いせいで風も弱く、時々すゞしく熱くなる真っ黒なドライヤーで、いつも長い時間をかけてふうちゃんの髪を乾かした。何も話さず、ただ黙つて乾かしてくれた。

そんなおばあちゃんのドライヤーは、おばあちゃんと一緒にふうちゃんの家で三回目の夏を迎えた。

ある日、おばあちゃんが「死んだ」。ふうちゃんは「死んだ」といわれてもよくわからなかつた。お母さんも、お父さんも、泣いてはいなかつた。お母さんは、

「おばあちゃんはもう帰つてこないのよ

といった。でも、おばあちゃんは今畳の部屋で静かに横になつている。お父さんは、

「もう二度とお話しできなくなるんだよ」

といつた。でも、もともとふうちゃんはおばあちゃんとあまり話をしなかつた。それで、ふうちゃんは悲しいとも、残念とも思わなかつた。

ご飯を作る人がいなくなつたわけでもなく、掃除が行き届かなくなつたわけでもなく、特に生活に変化はなかつた。

だけど、カレンダーはおばあちゃんが死んだ日からずつとそのままになつていたし、それをふうちゃん以外、気づいている人は誰もいなかつた。そして、ふうちゃんがお風呂上がりにおばあちゃんの部屋に行つた時、そこに待つている人は誰もいなかつた。ふうちゃんは頭の片隅でぽつんと思つた。「ああ。おばあちゃんはいないんだつた。」



ふうちゃんはとても久しぶりに、お母さんに髪を乾かしてもらつた。お母さんの最新式のドライヤーは、ガーガーと凄い音をたててふうちゃんの耳に強い風を吹き込んだ。小さな窓からでる変な空氣のにおいはなんだか気持ち悪かつた。耳の後ろにお母さんの手入れされた爪が刺さつて痛かつた。

そして、ふうちゃんが今までとのあまりの違いにびっくりしている間、あつという間に髪はぱさぱさになつた。耳にはまだガーガーとドライヤーの音が残つていた。

ふうちゃんは、ぱさぱさの髪を触りながら、お母さんは髪を乾かすのが下手だなと思った。どうして私が心地よくなるように乾かしてくれないのだろう。もういい。自分でやろう。そしてふうちゃんは、初めて自分でドライヤーにスイッチを入れ、頭の上で振りかざした。

さつきと同じ不快な風と音と熱さを感じた。そして耳の後ろには誰の指も当たらない。自分で耳の後ろに触れても、指が少し堅くて何も気持ちよく無いのだ。柔らかかったあの指は無い。

おばあちゃんはもういないのだ。

ふうちゃんはドライヤーのスイッチを消してぼんやりと思つた。もう一度とあの風を、指を、心地よさを感じることはない。ふうちゃんのお風呂上がりをあの部屋で待つ人は、これから、いない。

おばあちゃんはもういないのだ。

「死んだ」とはそういうことだったのだ。もう一度と、なくなることだったのだ。ふうちゃんの目から、涙がひとつぽんと落ちた。そうしたら涙が止まらなくなつて、ふうちゃんはわんわん泣いた。その声に驚いたお母さんとお父さんがすつ飛んできて、大泣きしているふうちゃんを一生懸命なぐさめようとした。けれど二人は、どうしてふうちゃんが泣き出したのが分からず、首をかしげていた。

それからふうちゃんは、一切髪をドライヤーで乾かそうとしなくなつた。乾かそうとするたびに、耳に触れないおばあちゃんの風が、指が恋しくなつて、泣いてしまいそうになるからだつた。いつも一番にお風呂に入つて、髪をタオルで「じじ」しふき、後は勝手に乾くのを待つた。お母さんは最初の頃は

「風邪を引くわよ。女の子なんだからきちんと乾かしなさいな。」



と言つたけれど、ふうちゃんが耳を貸さないのであきれてそのうち言わなくなつた。そんなふうに生活しているうちに、ふうちゃんはいつも髪を短く切るようになった。その方がより早く、乾くからだ。

そして五年が過ぎていった。ふうちゃんは十二歳。小学六年生になつた。まだ髪は短いままだつた。ドライヤーを使わないのがくせになり、少しでも伸びるとすぐに切つてしまつていた。でも、ふうちゃんは何故自分がドライヤーを使うのを止めたのか、さっぱり覚えていなかつた。そして、おばあちゃんのことも、思い出すことはなかつた。

ふうちゃんが毎日を楽しく生活している中で、おとうさんの転勤が決まつた。ふうちゃんは引っ越すことになつたのだ。ふうちゃんはこの知らせに喜んだ。友達と離れてしまうのは寂しいけれど、新しい場所で新しい家に住み、新しい友達が出来ると思うと胸がワクワクした。開いてもらつたお別れ会で泣いたり、住むことになる家を見に行つたり、引越しまでの日々を忙しくも楽しく過ごすふうちゃんにある日、お母さんが言つた。

「ふうちゃん、おばあちゃんの部屋の荷物の整理、頼んでもいいかしら。」

ふうちゃんはここ何年も、おばあちゃんの部屋に入つていなかつた。おばあちゃんが「死んで」半年ほどした頃から、物置として使い始めたのだ。だから、今のおばあちゃんの部屋には、所狭しとガラクタが積んであつて、ふうちゃんはげんなりとした。

お母さんの、

「特に必要無ければ全部捨てて良い」

という言葉通り、ふうちゃんは出てくるものをどんどん捨てていつた。古くてしみだらけの本の山、おばあちゃんの服、汚れたぬいぐるみ、何年も前年の賀状の束、全部全部捨てた。

ふうちゃんが頑張つていると、お母さんが様子を見にのぞいてきた。そして、ふうちゃんが「残すもの」として部屋の脇に積んだ数少ない品々の中から、真っ赤な背表紙のアルバムを取りだした。

「あら、お母さんたら。」

お母さんの声にふうちゃんは振り向いた。

「若い頃のお母さん、私にそつくりなのね。」

「おばあちゃんがお母さんに似ているの?」

とふうちゃんはお母さんに聞いた。お母さんはうんうなずいた。

「ほら、見て。」

差し出されたアルバムを見ると、大きな写真が一枚、丸々一ページを占めている。男の人と、女人人が、晴れ着姿で並んでいる。

「おじいちゃんとおばあちゃんの結婚写真だよ。」

お母さんは言つた。ふうちゃんは、じつとその写真を見つめた。

写真の中のおばあちゃんは、ふうちゃんの知つてゐるおばあちゃんでは無かつた。若くて、笑顔が素敵で、「おばあちゃん」ではなく「お姉さん」だった。ただ、真っ白なお化粧をしているせいか、お母さんに似ていないとふうちゃんは思った。

「私に似ているな」

と、思つた。笑顔の目元はそつくり、ふうちゃんのものだつた。

そんな風におばあちゃんが遺していった色々なものを掘り出しながら、ふうちやんは少しづつおばあちゃんのことを思い出していった。閉めきつた障子からオレンジ色の光が射してきたころ、その光の中にふうちゃんは何か黒いものを取り上げた。そして、思わずアツと声をあげた。

それはドライヤーだつた。真っ黒な、古いドライヤー。ふうちゃんはこれを見えていた。おばあちゃんが、これで毎日私の髪を乾かしていたのだ。なぜだか心臓がドキドキする。大好きだつたドライヤー。いや、ふうちゃんが好きだつたのはドライヤーではなく、おばあちゃんがこれでふうちゃんの髪を乾かすことだ。急に懐かしくなつてきた。そして同時にふと思つた。まだ動くのかな。

その晩、ふうちゃんはお風呂をあがつて、久しぶりにおばあちゃんの部屋への廊下を歩いた。ふすまを開けると、昼間頑張つてきれいにした部屋がふうちやんを迎えた。あのころの家具はほとんどない。でも、ドライヤーがぽつんと、待つていた。ふうちゃんがふと鏡に目をやると、ふうちゃんの目が向こうからも見返してきた。おばあちゃんそつくりの目。違う、おばあちゃんの目だ。

「ああ。」とふうちゃんは息を漏らした。おばあちゃんはいなこと思つていた。もう永遠に会わないと思っていた。けれど、こんな所にいたんだね。ただいま。ふうちゃん、今お風呂あがつたよ。

賀治のまちから

# 高校生小説大賞



ふうちゃんはおばあちゃんのドライヤーのスイッチを、かちんと入れた。静かな部屋にブーンという低い音だけが響く。それはとても気持ち良かつた。